

保育実習報告会

児 玉 理 紗

はじめに

本稿では、令和3年11月17日・12月1日に実施した保育実習報告会について報告する。実習報告会とは、毎年1回実施している1・2年生合同の行事であり、すべての実習を終えた2年生が実習で経験したことを報告する会である。2年生にとっては、自分が経験したことを人前で発表する機会であり、1年生にとっては先輩の話聞くことで、これから始まる実習に対する不安や疑問点を解消する機会ともなっている。

1 実習報告会の内容

実習報告会は、各回6名の学生による全体報告と、1年生と2年生混合のチューター別報告会の2部構成で実施した。

1-1 全体報告会

全体報告会では、保育所及び認定こども園での実習についての報告を3名が、児童福祉施設(児童養護施設・障害者施設・母子生活支援施設)での実習についての報告を3名が実施した。以下に4名の学生の報告内容を一部抜粋して掲載する。

【保育所】

2月の実習では発達の段階や道筋を自分の目で見たいという思いがあり、1歳児から5歳児クラスに2日間ずつ入らせていただきました。実際に子どもたちと関わったことで、発達の段階や年齢による差などを感じ、授業で学んだことを実習で経験したことでより理解が深まりました。最初の実習では、より多くの年齢の子

どもたちと関わっておくことで、年齢に合わせた遊びや活動を考えることになったとき、子どもたちの姿が想像しやすくなるのではないかと思います。

2月の実習では乳児クラスの子どもたちとの関わりに難しさを感じ、なかなか積極的に関わることができませんでした。その反省を生かし、8月の実習では先生方に質問も沢山しながら学び、言葉でのやり取りが難しい子どもたちだからこそ、表情や行動に思いが込められているのだと気づきました。給食を食べて「美味しい!」という表情を見せてくれる子どもや、カラフルな積み木を指さして「これは何色?」とまるで聞いているような子どもたちの姿から、少しずつ思いを理解して関われることに喜びを感じ、気がつくとも実習が楽しいと思えるようになっていました。

【児童養護施設】

私たち実習生は、職員と一緒に子どもたちの起床を促したり、掃除、炊事の準備、学習を見たり、自由時間は一緒に過ごしたりして子どもたちと関わっていきました。実習を通して、子ども理解しながらその子自身にあったペースで関わられていたり、子どもたちの最善の利益になるように各担当で支援されていたり、また気難しい子どもと関わっていく際は、信頼関係や安心感を感じられるためにもその子自身の好きな話題や子ども同士の会話の内容を覚えておき、ふとした時間に話を振ってみたりして、自分への関心が継続していつているという認識を持ったときに関係性が構築されていくというお話を聞き、子どもと職員との関わりについて学

ぶことができました。

初めはどういう風に関わっていけばいいのか不安なこともありました。すぐくさくさに話しかけてくれる子どももいたので安心して関わっていくことができました。

【障害者施設】

発語がある方や自分から近くに来てくださる方は多く関わることが出来たのですが自分の部屋によくいる方や発語がない方との関わりを難しく感じました。

最初はどの声をかければよいのか分からないという不安から自分から話しかけることが出来なかつたので職員の方に相談をすると言葉で会話をしようと思わなくても名前を読ばれるだけでもうれしく感じますよとアドバイスを頂きその日から1日一回は名前を呼ぶよう意識しました。名前を呼ぶとニコッと笑ってくださったり表情で会話をすることが出来ました。

関わり方が分からないことから不安に思い行動できていませんでしたが、自分から園生の方に関わろうとするとその気持ちに応えてくださる方たちなので日を重ねるごとに距離も近くなっていき親しみを持って関わることが出来ました。

実習で経験したことや学んだことを自分なりに言語化し報告した内容は、さすがすべての実習を終えた2年生であると感じさせられるものであった。また多くの人が聞いているという状況の中緊張も見られたが、どこか自信に満ち溢れ、確信を持った表情が印象的であった。

また質疑応答で教員がいくつか質問を行った

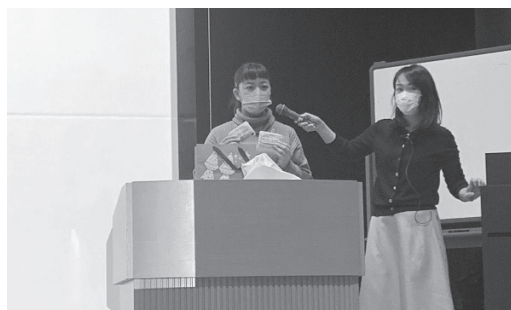


が、その場合においても学生たちはしっかりと答えていた。その場で質問に対する答えを考え、みんなの前で発表することは難しいが、臆することなく堂々と答える2年生に驚きと頼もしさを感じた。

さらに、「今から初めての实習で、期待や不安があると思います。特に実習初日は緊張で胸がいっぱいだと思います。私もそうでした。実習が始まる前は10日間長いと思っていましたが、日を重ねていくうちにあつという間に最終日になり、まだ続けたいなという気持ちになっていました。保育実習は保育士になる為に必要な事です。準備や日誌を書く事は大変な事だと思いますが、子ども達の笑顔を思い浮かべながら前向きに頑張ってください。」などと、1年生に向けたメッセージを語ってくれた学生も多かった。今回の報告会では自ら「報告したい」と立候補した学生もいた。1年生のときに自分も同じように2年生の発表を聞き、2年生になったらやってみたいと思っていたようである。

その他、実習で使用した制作物を見せながら報告してくれた学生もいた。昨年の実習報告会で、手作りの名札をいくつか作っておき、子どもたちとの関わりをきっかけにしたという話があったが、今回も同様の報告があった。

実習報告会は単に実習で経験したことを伝えるためのものではなく、実習を経験したからこそ、1年生に伝えたいという2年生の思いも引き継がれていくのだということを改めて実感させられた。



1-2 チューター別報告会

チューター別報告会では、チューター毎に分

かれ、1年生と2年生混合の小グループを作り報告会を行った。

ここでは、全体報告会では報告しなかった学生も1年生に向けて報告を行った。1年生にとっては、気軽に2年生に質問ができ、その質問に丁寧に2年生が答えていた。ときには、何が話題に挙がったかは分からないが大盛り上がりしているグループもあり、全体報告会では聞くことができない細かい事柄なども話しているようであった。

コロナ禍ということもあり、1年生と2年生が交わる機会はほとんどなく、このように実際に話をして交流したのはこの実習報告会のみであった。同じ保育者を志す者として、縦のつながりの重要性を再認識した時間でもあった。



2 実習報告会の振り返り

2-1 1年生の感想

実習指導の授業をしていると、学生が実習に対して「とにかく不安」と言うのをよく耳にする。何が不安かは分からないが漠然とした実習に対する不安を解消することは授業ではなかなか難しいが、自分にとって身近な先輩の話を聞くことは、「大丈夫かもしれない」「少し楽しみになった」などと安心感につながったようである。

また、実習の経験がない1年生にとって実習は「その場で学ぶもの」であり、実習前に準備できることがあることや、準備することによって不安が軽減されることが分かりにくい。2年生の具体的な報告を聞いて、実習までに準備することが明確になったようであった。

2-2 2年生の感想

2年生にとって実習報告会は2つの意味がある。先に述べたように、実習で経験したことを言語化して人に伝えることで、自分自身の実習の振り返りになること。もう一点は、他の2年生の報告を聞くことで学びが深まるということである。それは次のような記述にも示されている。

「園やその先生方によってやり方や学んだことがそれぞれ違うのだということ、その人その人によって印象に残った出来事や体験、経験できたことが違うのだということが分かった。」

「子ども間のトラブルの仲介に入るときの話、乳児クラスでは言葉以外で伝えたり読み取ったりやりとりをすることなどを知ったり、指導案は初日に出すこと、絵本や手遊びを予め準備しておくことなどの共通認識、自分自身が楽しむ姿を見せることや言葉選びが大切なこと、保育者の言動には意図があることなど自分と重なる学びがあった。」

3 まとめ

実習報告会は、1年生にとってはこれから始まる実習に対する不安の解消、準備することが明確になるなどの経験となった。また2年生にとっては、実習の経験を言語化することで、実習の振り返りとなり学びを深める経験となった。

コロナ禍で学生同士が話をする機会は減った今年度であったが、このように1年生と2年生が共に話をするのができたのは貴重な機会であった。2年生が自分自身の経験を話す様子を見てみると、たった1年でこれほどまでも頼もしくなるのかと驚かされる。50日の実習経験を自分のものにした証しである。また、子どもや保育のことを真剣に、そして楽しく語り合うことができるこの機会が、保育者として就職する学生たちの心に何らかの形で残ってくれればと思う。